

# 戦後64年後の奇跡のような朝鮮人死亡者名判明

## 一筑豊朝鮮人強制連行フィールドワークより

むくげ通信 264号 2015.5

飛田雄一

前号で強制動員真相究明ネットワークの集会（2014.3.15～16、立命館大学）のことを書いた。そのネットワークの前事務局長・福留範昭さんは、福岡の方で、2010年5月に亡くなられたが、彼を偲ぶ会と筑豊フィールドワークが5月17日、18日、同ネットワークにより開催された。フィールドワークが土日、偲ぶ会が土曜日の夜だった。当初、土曜日のフィールドワークは、住友忠隈鉱、三菱飯塚鉱朝鮮人寮、麻生吉隈鉱、明治平山鉱の予定だったが、韓国から参加の崔洛勲さん（73）の父が貝島炭鉱で働いていたことが直前に判明して同鉱山を訪ねることになった。崔さんは2006年に学生センターでも証言集会を開いたことがあるが、1942年春ごろに日本に強制連行されその後の消息となっている父の消息を探していたのである。戦時中に父から家族に送られた写真と一緒に写っていた人が貝島炭鉱にいたことが分かり、それを手掛かりに支援グループが同炭鉱の年金記録を調査して1942年5月～43年4月、父が同炭鉱で働いていたことが判明したのである。朝日新聞2014.5.18の一部を紹介しておく。



朝日新聞 2014.5.18 関釜裁判ニュース合本



崔洛勲さんの父の写真

私はこの日、学生センター古本市の撤去日でフィールドワークには間に合わず夜の福留さんを偲ぶ会からの参加であった。ちなみに古本市の売り上げは400

万円に限りなく近い3,994,812円であった。古本提供者、お客さん、ボランティアに感謝感謝である。

偲ぶ会会場は、花房俊雄さんが経営する日本料理店「花ふさ」でおいしい料理とお酒をいただきながら福留さんを偲んだ。花房さんは、関釜裁判（釜山実行委員会・女子挺身隊公式謝罪等請求事件）の中心メンバーでもある。その集大成といえる4月発行の『関釜裁判ニュース 1993～2013』（B5、944頁、5000円）は内容も重量も充分に重いものだ。

日曜日のフィールドワークは、9:30博多駅出発の同じく筑豊コースだ。豊州炭鉱、古河大峰炭鉱、真岡三坑慰霊碑を訪ねた。今回の案内は2日とも筑豊の朝鮮人強制連行を長年調査している元高校教師・横川輝雄さんだ。内容のぎっしりつまつたA4、32枚の資料が準備されていた。表題の「奇跡のような死亡者名判明」とは、最後に訪問した「真岡三坑慰霊碑」に氏名不詳とされていた朝鮮人労働者の名前が2009年1月に判明したのである。

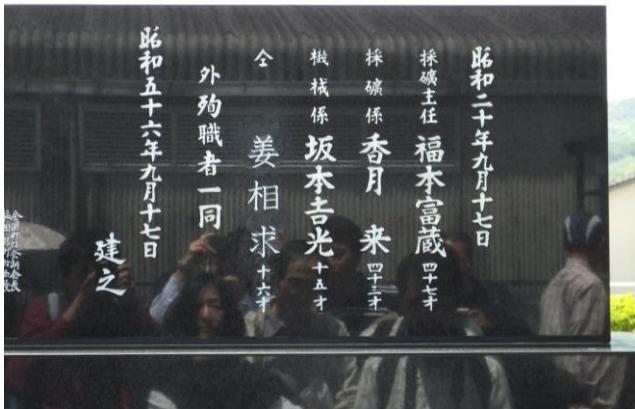
最初にたずねた豊州炭鉱には、唯一？坑口がのこされている。住宅街にあるがそれらの住宅は炭鉱閉鎖後に建てられたものだ。斜坑で歩くのが怖いほどの傾斜だが、70Mほどは入ることができるというが、私たちは懐中電灯をたよりに10Mほどだけ少しだけ入った。電灯を消すと恐ろしい空間で、ここで過酷な労働を強いられた朝鮮人のことに思いをめぐらした。



豊州炭鉱の残された坑口と横川輝雄さん

古河大峰炭鉱は閉鎖されているが大規模は炭鉱の様子が分かるところだ。当時の朝鮮人宿舎には別の建物が建っているが、そこで朝鮮人に対して凄惨なリンチが行われたことが知られている。病院跡も残されている。（左、元朝鮮人宿舎、右、病院跡）





## 真岡三坑慰靈碑



## 石碑全面と田中正芳さん

上が、真岡しんおか三坑慰靈碑で、亡くなられた方のお名前が書かれている。4人目の「姜相求」の文字が他の文字と違っているのがお分かりになるだろうか。1981年（昭和56）9月17日に地元の方々の努力によってこの慰靈碑がつくられたが、その時、機械係の氏名不詳朝鮮人がそのまま不詳という文字が刻まれたのである。年齢は当時16歳、地元の人々は建立後もこの氏名不詳の朝鮮人のことを気にかけていたのだ。この事故は、1945年9月17日、敗戦後1か月後に起っている。

それが、本当に奇跡のように 2009 年に判明したのだ。碑の裏にその経緯が刻まれている。プリントした資料を以下にコピーしてみる。何とか読んでいただけのではなかろうかと思う。(下段)

文章もとてもいい。碑建立の中心になられたのは、当町会議員の田中正芳さんでのちに町長になられている。4名の死亡者のうちのひとり坂本吉光さん（当時15歳）の同僚だった。末期がんで先日まで抗がん剤治療をしていたとのことだが、出迎えてくださりお話を聞かせていただいた。「不詳」の朝鮮人を探すのに努力されたお話を心にしみた。2008年12月、地域の隣保館の人権講座で講師をつとめた横川さんに不詳朝鮮人ことを伝えた。横川さんは、厚生省名簿（1946年）に「徳山相求」の名前を発見した。横川さんが強制動員真相究明ネットワークの福留範昭さんにつなぎ、福留さんが「韓国の対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」につなぎ、お名前が判明したのである。田中さんらの民族を越えた朝鮮人少年への友情が64年後に「奇跡」を生んだのだと思う。充実のフィールドワークだった。

てもわからず、「不詳」と刻みました。しかし、その人々はその後もこの少年のお名前を探し続け、ついに今年一月に韓国政府の委員会の協力も得て、「徵用」で強制連行された少年の本名をつきとめ、「姜相求」（カンサング）さんと刻銘しました。事故から六十四年目、この碑を建立してからでも二十八年目のことでした。同情や哀れみでなく、あるがままに対等に向かい合ってきた人達に「命・愛・人権」の尊さを切に感じ、多くの方々のご支援により献花式を行います。

この碑に刻まれている「昭和二十（一九四五）年九月十七日」は、真岡三坑の事故の日で、当日は枕崎台風の嵐の中を、停電になつたので、坑内のスイッチを切るために、勇気をもつて、若年ながら無人の坑内に入つた韓国人少年が昇坑しないので、心配した同年輩の日本人少年が救助に入坑しましたが、昇坑せず、ついには上司の一人の日本人が相次いで入坑しましたが、また昇坑しませんでした。自分の命も顧みない尊い行動でした。そこで、地元部落の人達が総力をあげて救助活動をしましたが及びませんでした。終戦の混乱の時代に尊いものでした。

ボタ山の処理も終わり、三坑の記憶がなくなるのを

命・愛・人権  
「真岡炭鉱第三坑殉職者慰靈之碑」について

真岡三坑事故韓国人少年名刻銘獻花式  
遺族招へい実行委員会（糸田町隣保館内）